

偽作の法句經について

水野弘元

一 偽經の種類と性質

シナでは、インドの原典からの翻訳でなく、シナにおいて作られた偽りの仏教聖典が、仏教がシナに伝えられて間もない頃から流行し、このような偽經の数は、後代になる程、次第に多くなって行つた。

これを代表的な經錄について見るに、先ず道安錄（三七四）の疑經錄によれば、⁽¹⁾真実の訳經たることを疑っていたものに、宝如來經二卷乃至覓歷所伝大比丘尼戒一卷の二六部三〇卷が挙げられている。これは四世紀後半に存在したものであつて、道安が疑偽經として指摘したものである。そしてその大部分は六世紀初頭の僧祐（四四五—五一八）の頃にも存在し、流行していた。

次に隋代になると、例えば仁壽錄（六〇二）では疑偽經として二〇九部四九一卷を掲げていて⁽³⁾、これによつて、梁代以来八十余年間に、百部近くが増し、偽經は殆んど倍加したことが知られる。尤も同時代の歷代三寶紀（五九七）には、疑偽經の項目が全くなく、神がかりで誦出したものも、抄略した經典も、すべて正經であるかのように記録している。また法經

次いで僧祐は道安が指摘した疑偽經の他に、新に疑偽經として八八部四一四卷を追加している。⁽²⁾これらの疑偽經は、多くは作者不明のものであるが、中にはその成立が明示されて

經、梵網經、遺教論等をも、歴代三宝紀は真正なものとなし、前二經の訳者を鳩摩羅什とし、遺教論を真諦訳としている。

その真偽は別としても、とにかく歴代三宝紀の著者費長房は、史実性以外に、道教に対して仏教を卓上するという意図をもつていたために、事実をまげていることも已むをえないことであった。しかしこの作為が後世に悪影響を及ぼし、史実がかくされて、疑偽經が正經に編入されるに至ったものが少くない。

次に歴代の經錄の中で、最も整備され、後世の範となつた智昇の開元錄(七三〇)では、疑惑經として一四部一九卷⁽⁴⁾、偽妄經として三九二部一〇五五卷⁽⁵⁾、計四〇〇部以上のものを掲げている。これは一三〇年前の仁壽錄の約二倍であつて、そこには以前の經錄に掲げられていない多くの偽經が含まれており、この時代に至るまで、引続いて偽經が作られたことを物語っている。そしてこの中には、近時燉煌で発掘された偽經も多く含まれている。

開元錄の現存正經一〇七六部に対して、偽經がその三分の一以上の四〇〇部もあつたということは、仏教の名をかりて、仏教ならざるもの、いかがわしいもの、がいかに多く流行していたかを物語るものである。これらは恐らく實際の必要から作られたものであるだけに、民衆に対する偽經の影響には、少なからざるものがあつたであろう。

それでは一体このような偽經は、いかなる理由から作られたものであろうか。それには次のようない点が考えられる。

一 仏教をシナ人の古來の民間信仰と結び付け、謠讖（豫言）、世術、陰陽吉凶、神鬼禍福等の種々の民間信仰に仏教を応用し、仏陀がこのような信仰を説いたのであるとして、仏陀に仮託して作られたもの。例えば呪術的な呪媚經、延命幸福を願う延寿經や統命經、治病のための救疾經、死後に閑する招魂魄經や安墓呪經、民間の神を説く天公經などがそれであり、更には十王思想、地藏十輪思想なども、民間信仰と仏教とが合体したものである。

二 仏教の教理を老莊などのシナ在來の思想と一致融和させ、又は道教の思想によつて仏教思想を解釈するために作られたもの。しかし仏教の正しい教理が次第に伝えられるようになると、シナの仏教者によつて、仏教の特徴が十分に理解され、仏教は道教等の思想と違つたものであるとされるようになった。それでも民間信仰的には、仏教と道教とは密接に關係し合い、後には道教の側から仏教經典を模倣するようにもなつて、多くの道藏が作られた。仏教經典中の偽經の例として、老子化胡經、老子教人服薬修常住經、達空道士分別善惡度苦經等がある。

三 靈感によつて感得誦出された經典。この例としては、前に述べた齊末に、太学博士江泌の娘、僧法尼が誦出した二

十余部の經がある。彼女は誰からも教わることなく、入神の状態によって、經典を誦出したが、それは世人に大いに珍重された。その他、靈示によつて經典を作り、多くの信奉者を集めた人も少くない。例えば青州の比丘道歎が作った妙好宝車經とか、道人妙光の作った薩婆若陀眷屬莊嚴經とかがそれであつて、彼等は邪教の徒と見なされ、その經典は没収されて、流通することを勅命によつて禁ぜられた。三階教祖の信行禪師（五四一—九四）が作った三五部四〇卷の經典も、必ずしも靈示によるものではなかつたが、彼の歿後間もなく偽經として禁止された。三階教の經典は屢々排斥されたが、時には正經として流布を許され、聖經中に入藏されたこともあるが、最後は偽經として決定された。

四 翻訳された經や論が余りに龐大であり、また不必要的部分を含んでいるので、これを簡略して理解し易いようにしたもの。例えば前に述べた齊の文宣王は熱心な佛教信者であり、佛教興隆のための大きな外護者であつたが、佛教を広く普及させることを目的として多くの抄經を作つた。それは善意に基づくものではあつても、「大本の内において、或は増し或は損い、斟酌して經を成す。聖教に違反し、真典を蕪亂⁽⁶⁾す」と批評されて、偽經と断定された。

五 佛教の正しい教理をシナ佛教に適するように創作したもの。佛教では佛教聖典の真偽に関しては、昔から、その聖

典の中に、佛教の根本原理としての諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の三法印の思想が含まれているか否か、これに相違矛盾する思想がないかどうか、にあるとされている。この意味で、佛教の根本原理を含んだ聖典は、インドでは仏滅後にも数多く作られた。殊に大乘經典はすべて後人の手に成るものである。インドでこのような佛教經典が、仏說として未詳作者達によつて作られたのであるから、シナでもこの意味の經典は作られてよい筈であるけれども、シナでは仏說としての經典は、何人によつても作ることが許されず、もし人造の経であれば、それは必ず偽經として排除された。正しい教理を含んだものも、翻訳以外のものは、すべて偽經とされたのはそのためである。

しかし実際には、シナで作られた經典が、翻訳經であるかのような偽装をして、真正な經典の中に紛れ込んでいる場合もないではなかつた。それは表面の文字章句にしても、翻訳經らしい姿をしており、またそこに含まれている教理内容にしても、決して佛教の正しい教説と矛盾するところがないので、それがシナで作られた偽經であることを感付かれないのでいたものである。それらの經典は、諸經錄でも偽經とされることなく、正しい翻訳經として記載され、多くは今日に至るまで、藏經中に真經として堂々と加えられているのである。

先年筆者がその偽作であることを証明した金剛三昧經はこ

の一例であるが、その他有名なものとして、梵網經、菩薩瓔珞本業經、仁王般若經、遺教經論等は、一部の經錄で正經たることが疑われたこともあるが、多くの經錄は真正な翻訳經として、その訳者を鳩摩羅什、真諦等となし、明治時代に至るまで、疑われることもなく、重要な經典として研究読誦されて来た。同様に円覺經や首楞嚴經なども、多少の疑問をもたれつつ、禪家において重要經典とせられた。

明治時代以後になると、望月信亭博士等のすぐれた学者によつて、これらはすべてシナ撰述の偽經であることが指摘されて、今日に至つていることは周知の通りである。大乘起信論については、偽書か訳書かについて、学界でまだはつきりと決定説を見ていない。とにかくこの類の經典はその他にも存在するであろう。

今問題としている偽作の法句經は、經錄では初めから偽經とされており、真正な翻訳經とされたことはなかつた。しかしこの經に盛られている思想内容は、仏教の根本特質と必ずしも矛盾相違するものではない。

- 1 出三藏記集卷五（大正五五・三八b以下）
- 2 同上（大正五五・三七c、三八c以下、四〇a以下）
- 3 仁壽錄卷四（大正五五・一七二b以下）
- 4 開元釈教錄卷一八（大正五五・六七一b以下）
- 5 同上（大正五五・六七一a一六八〇a）

6 法經錄（大正五五・一一七b）
7 水野弘元、菩提達摩の二入四行と金剛三昧經（駒沢大学研究紀要一三、三三一五七頁）

二 偽作法句經の紹介

法句經として普通に知られているのは、三国時代に吳の支謙等が訳出した二卷の法句經である。本書は三十九品から成つてゐるが、その中央の部分の二十六品はパーリ法句經（Dhammapada）に相当するものであり、その他の十三品は、主として説一切有部の法句經としてのウダーナ品（Udāna-varga）から訳出されたものである。つまりこれは真正の法句經が翻訳されたものである。

ところが偽作の法句經は、真正の法句經とその名は同じでも、内容的には全く違つたものである。偽作法句經の実物は久しく知られなかつたが、今世紀になつてから、燉煌の窟内から発見され、そこには法句經の註釈書も見出された。これらは大正藏經第八五卷一四三二頁以下に收められている。偽作法句經については一、三の經錄以外には、その名すら伝えていない。また我国の請來目録等にも全くその名が出ていないから、本經が日本に伝えられたこともないようである。この点から、偽作法句經は、一般には余り知られもせず、また流行もしなかつたことがわかる。本書を偽經として掲げてい

る経録には次の如きものがある。

一、大唐内典録（六六四）、その卷一〇の偽經録の中に⁽¹⁾

法句經両卷 下巻寶明菩薩

とし、これは一類の偽經論一二五種と共に掲げられているが、その最後に「右諸偽經論、人間經藏往往有之、其本尙多、待見更錄」としている。これによれば、唐初には民間の寺院の經藏中に、今まで知られなかつた新しい偽經類が往々にして存在し、これを内典録の著者道宣自身が発見して、ここに記載したのであって、彼は今後も見付け次第、更に記録するつもりであると云つてゐる。ここに掲げられている偽法句經は二巻から成り、註記によつて、下巻が宝明菩薩を述べてゐることが知られる。現存の偽法句經は一巻本であつて、そこには宝明菩薩が仏の対告衆となつてゐるから、内典録の偽法句經二巻中の下巻が現在の偽法句經に当ると思われる。次に二、開元釈教録（七三〇）、その卷一八の偽妄經録の中に⁽²⁾

法句經二巻 下巻寶明菩薩、時聞、多有二卷流行、與集傳中法句經名同文異、此是人造

とあり、その註記も内典録と大体似ている。唯だ当時も偽法句經としては、現存のもののように下巻だけの一巻本が多く行われていたことが知られる。そして開元録の著者智昇は、本經が真正の法句經とは経名は同じでも、その内容は全く異つたものであつて、偽作にすぎないことを注意してゐる。

三、貞元釈教録（八〇〇）、その卷二八に、内典録の記載を引用して掲げてゐる。

ところで不思議なのは大周刊定録（六九五）の記事である。

そこでは卷一三一一四の現蔵入蔵録中に、法句經として一巻本と二巻本とを別々の場所に掲げてゐる。即ち卷一三の大乗經の中に⁽⁴⁾

法句經一巻

とし、更に卷一四の小乘賢聖集伝中に⁽⁵⁾

法句集一部二巻

としている。後者の法句集二巻は明らかに法救撰とされる真正の法句經を指したものである。この法句經が法句集と呼ばれることは屢々ある。前者の一巻法句經が何を指すかは明らかでないが、それが大乗經とされている点から、現存の一巻の偽法句經も大乗の教理を説いたものであるから、或はこの偽法句經を掲げたものかも知れない。もしそうだとすれば、大周録では偽法句經を真正の經典として、当時の大藏經の中に編入していたと考えられる。大周録は信用のおけない杜撰な経録であるから、このような誤りがあつたとしても不思議ではない。

偽法句經は大正藏經で三頁余の小經であつて、それは真正の二巻法句經の四分の一程の大きさにすぎない。偽法句經は全体が十四品から成つてゐる。今各品の内容を簡単に説明す

れば、次の如くである。

一、序品。世尊が日月宮の中の勝藏殿において、天の菩薩摩訶薩十万人と俱に居られた。それは勝積菩薩、普賢菩薩、文殊師利菩薩、金剛幢菩薩、金剛慧菩薩、觀世音菩薩、決定慧菩薩、弥勒菩薩等々である。また宝明菩薩も無量の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷百千万人と共に来会し、無量の天竜夜叉、護法善神及び他方の無数の菩薩も集っていた。

二、不壞諸法菩薩説宿縁品。衆中の不壞諸法宝明菩薩が、自分は過去の燃燈仏の時に出家して、不壞諸法宝明といふ菩薩となるであろうとの記別を授けられた。その宝明の号の由來を仏に質問する。仏は宝明菩薩のために、「諸法の名字はその性が空であつて、有無に在らず。名字の性空である故に、毀呰讚譽に對しても瞋喜することがない。毀呰讚譽は共に空であるから云々」と説かれる。

三、觀聲性空証實際品。仏の説法は続けられる。声性は空であり、音声は耳根を詮かすのみで、実体がない。

四、觀三處空得菩提品。内外中間の三處には実法あることがない。それが解脱であり菩提である。三處とは、眼が内、色が外、心が中間にある。眼は自ら見ず、諸因縁に属するから空である。色は自ら色と名づけず、眼に属する時色となる。眼性空の故に色も亦実がない。心は形相なく、处在がない。心は内外が空なることを知つて、これに著しない。耳鼻舌身

意等の三處についても同様である。貪著するから三有に流転し、旋火輪の如く休む時がない。

五、親近善知識品。阿耨多羅三藐三菩提を得るために、善知識に親近して法要を請聞し、甚深の要句を聞く必要がある。それでは善知識とは何であるか。諸法の空相、無作、無生滅をよく解し、諸法本来究竟平等であることを了達し、眞如実際に住しつつ、畢竟空中に熾然として建立する人を指す。

六、二十一種譬喻善知識品。善知識を説くに、「善知識とはこれ汝の父母であり、汝等の菩提身を養育するものである」等の二十一種の譬喻をもつてしている。

七、宝明聽衆等悲不自勝品。以上の妙法及び善知識に関する甚深の法要が釈尊によつて説かれると、宝明菩薩を始めとする諸天衆は、喜びの余り、悲涙下ること雨の如くであり、現在の見仏聞法を改めて歎喜長歎した。三千大千世界の一切の仏國土も大地震動した。

八、普光莊嚴菩薩等証信品。東方極遠の土地に宝土国があり、宝相仏が出世し、そこに普光莊嚴菩薩があつた。彼は大地の震動を見て、宝相仏に質問する。その理由が説かれると、普光莊嚴菩薩は無量の天菩薩と共に、娑婆世界にやつて来た。宝明菩薩は空中の光相を見て、釈尊に質問する。仏はその理由を話される。その中に普光莊嚴菩薩等は地上に下つて、世尊を合掌礼拝し、仏に親近善知識法を問う。

九、煩惱即菩提品。仏は彼等のために、善知識には大功德があつて、衆生の貪瞋痴等の煩惱の中において仏法を建立し、

大願船に乗じて生死の海を運載し、涅槃の岸に至らしめるのである。

また善知識に依止すれば、煩惱界中につても畏れることなく、八風が吹いても動することなく、諸魔外道の難を畏れることがない。

一〇、求善知識不惜内外寿命嫌疑品。故に善知識に会えれば、必ず身命を惜しまずして、供養恭敬すべきである。また善知識に対し疑惑を起してはならない。疑うならば甚深の法句を正しく受取ることができないからである。

一一、普光問如來慈偈答品。普光莊嚴菩薩は、甚深の法句を正しく受取るとは何であるかを仏に問う。仏はここで二十四偈の法句を説かれる。本經全体が法句經と呼ばれるのは、この二十四偈の法句によつてである。この法句については後で述べるであろう。大衆はこの説法によつて無生法忍を得た。

一二、授記品。宝明菩薩は釈尊から、汝は八十万劫の後に宝明仏となり、その国土を厳淨と名づけ、衆生は純一の大乗である、と記別し、また他の諸菩薩にもそれぞれ記別を授けられた。

一三、伝持品。仏は文殊師利の質問に對して、この經が甚深にして聞くこと難きこと、もしこの經を聞けば、無数の仏

に親侍し、衆多の德本を植え、聞法することができること、

この経は将来第八地の菩薩の手によつて護持されることを説かれた。

一四、護經不怠品。仏は大衆及び宝明菩薩に、この経を懈怠なく護持すべきであると命ぜられる。一切大衆はこの説法を聞いて、歡喜奉行した。

これで形式的にも一つの纏まつた經典の体裁をなしており、またその所説の内容にしても、仏説として不都合なもの毫も見出されない。唯だ品名にかなり変なものがあり、殊に第一二、第一四の二品は、その品名と本文との区別がつかない程に曖昧になつてゐる。

最後に偽法句經第一品の法句二十四偈を掲げて、後の参考にしておきたい。⁽⁶⁾

1 佛子善諦聽 我今如實說 一切諸法性
2 諸佛依_二貪瞋_一 如_レ坐_ニ於道場_一 塵勞諸佛種
3 本來無_レ所_レ動 *原本は座
4 五蓋及五欲 爲_ニ如來種性_一 常以_レ是莊嚴
本來無_レ所_レ動
5 媒欲及邪見 幷餘結使等 究竟解脫相
本來無_レ所_レ動

諸佛從_レ本來 常處_ニ於三毒_一 長_ニ養於百法_一

如レ成ニ於世尊ニ

見レ一以爲レ一

諸法從レ本來 無レ是亦無レ非 是非性寂滅
本來無レ所レ動

若有レ聞ニ此法一常修ニ寂滅行一知ニ行亦寂滅一
是則菩提道

一切諸衆生 實無レ有ニ生滅一 生滅卽涅槃
本來無レ所レ動

若欲レ證ニ此法一親ニ近善知識一 善學ニ諸方便一
度ニ脫於群生

一切諸法相 從レ緣無ニ起作一 起作性如如
本來無レ所レ動

我今說ニ此法一 爲レ攝ニ有衆生一 若無ニ我見一者
究竟無ニ所說一

一切諸文字 無ニ實無ニ所依一 偕同一寂滅
本來無レ所レ動

此是金剛句 決了諸邪見一 一切外道等
盡ニ力無ニ能壞一

說*諸布施福一 施福如ニ野馬一 *原本は諸、一本及び疏による
究竟不可得

若有ニ諸衆生一 得レ聞ニ如レ是經一 雖ニ在ニ三塗中一
究竟清涼樂

若說ニ諸持戒一 持者爲ニ迷倒一 *原本は到、一本による
無ニ善無ニ威儀一 戒性如ニ虛空一

若聞ニ此經名一 何況讀誦者
及解ニ一句義一 必生ニ諸佛國一

若見ニ瞋恚者一 忍亦無ニ所レ忍
以レ忍爲ニ輪鞅一 知ニ瞋等ニ陽炎一

若有ニ此經ニ處一 我恒在ニ其中一 爲レ護ニ如レ是人一
令レ得ニ無生法一

說諸精進業一 為ニ增上慢說一 無ニ增上慢者
無ニ善無ニ精進一

以上ニ四偈の内容は、本經所說の全体を一應纏めた形のものとなつておリ、この法句によつて、本經全体が代表されるとも云える。本經が法句經と呼ばれるのもそのためである。また本經が他の文献に引用されている場合にも、この法句からのものが最も多い。

因みに同じく燉煌発掘の法句經疏についても一言しておきたい。本書は大正藏經で九貢余の一巻本であり、偽法句經の三倍弱の大きさである。⁽⁷⁾そこには作者の名は掲げられていない

16 參羅及萬像 一法之所レ印 云何一法中

如レ生ニ種種見一 *參羅は森羅に同じ

17 一亦不レ爲レ一 爲レ欲レ破ニ諸數一 淺智之所レ聞

いが、著者はかなりの学者であつたらしく、文章も流暢で立派なものである。そこには起信論、中論、百論、大智度論、

摂大乘論、肇論、大品般若、諸法無行經、淨名經、等が引用されており、玄奘訳のものは全く見えない。またその用語や学説にしても、玄奘の新訳によるものではなく、真諦訳による依他性、分別性等の語が用いられているから、本書の著者は恐らく摂論宗に關係ある人ではないかと思われる。後には偽法句經は主として禪家によつて引用されるようになつたが、この疏には禪宗關係の思想や用語は全く見られない。以上の諸点から、この法句經疏は、玄奘より以前、又は玄奘訳が一般に引用される以前に、恐らく七世紀中頃までの間に、著されたものではないかと思われる。もしそうだとすれば、偽法句經の成立はそれよりも遡ることになる。偽法句經が六六年撰の内典錄に掲げられているのは当然である。

- 1 大正五五・三三五c
- 2 大正五五・六七七a
- 3 大正五五・一〇二一c
- 4 大正五五・四六五a
- 5 大正五五・四七一c この経名は更に四七二aにも掲げられて いるが、それは重複による誤りである。
- 6 二四偈は大正八五・一四三五a以下にある。因みにこの原本は中村不折氏蔵本であり、他の一本は大英博物館蔵本である。
- 7 法句經疏(大正八五・一四三五c—一四五a)原本はフラ

ンス国民図書館蔵。首部に約二〇行の欠漏がある。

三 偽法句經からの引用について

偽法句經については、前述の如く、内典、開元、貞元等の唐代の二、三の經錄に掲げられている以外には、唐宋代の主として禪宗關係の文献の中に、偽法句經からの引用が見出されるにすぎない。それらの文献においては、単に法句經の名によって、その文章が引用されているが、これは真正の法句經からのものでなく、偽法句經からのものである。偽法句經を引用している文献には、次の十種内外のものがある。

一、達摩禪師論。これは燉煌発掘の文書であつて、從来全く知られなかつたものである。大正藏經にも收められて居らず、橋本凝胤師の所有に属し、これを最近関口真大教授が始めて發表された。⁽¹⁾本書は菩提達摩の作とされるが、それは疑わしい。しかし本書の奥書に「開耀元年六月普仁寺主道善受持日宣」とあるから、これを受持した道善なる人が、既に開耀元年(六八一)には、これを伝写したことが知られるから、禪宗の五祖弘忍(六〇二—一七五)、六祖慧能(六三八—七二三)又は神秀(六〇六—七〇六)の時代に當る早い時期に本書が存在していたと思われる。受持者の普仁寺主道善については、僧伝等に全く知られないから、彼が禪僧であつたかどうか不明であるが、本書が達摩系の禪者によつて作られたことは言

うまでもない。そして達摩に仮託されている文献としては、本書の成立は早い時代に属すると云える。そこには達摩の著とされる少室六門の何れにも見られるような、禅宗的特色は余り出ていない。

ところで本書には、偽法句經からの引用は、

法句經云、以_レ貪_レ色故、流_レ轉三有、如_ニ旋火輪_一無_レ有_レ休已
というのが一回ある。⁽²⁾これは偽法句經第四品の「以_ニ貪著_一
故、流_レ轉三有、如_ニ旋火輪_一、無_レ有_レ休也」⁽³⁾を引用したものであつて、そこには字句に多少の相違があるが、偽法句經からの引用と見てよい。本書の引用文の字句の相違は他の文献からの引用においても見られる所である。

二、大乘五方便北宗。本書も燉煌から発掘されたものであるが、大正藏經には収められていない。フランス国民図書館に蔵されているのを、故久野芳隆氏が発見し、これを宗教研究に始めて発表した。⁽⁴⁾その後宇井博士も禅宗史研究（一）の附録に北宗残巻の一として掲載された。本書は神秀（六〇六—七〇六）の作と推察されるが、もしそれが事実であるとすれば、八世紀初頭には既に存在したことになる。本書には「法句經云」として、偽法句經第一品の一二偈中⁽⁶⁾の第一四偈が引用されている。

三、諸經要抄。本書も燉煌から発見されたものであつて、一種の偽經である。首部の欠けた不完全なものであるが、こ

の中には

念誦結護法普通諸部

三藏金剛智授與灌頂弟子

という文があり、次いで四種念誦、真言、曼荼羅等の秘密法門が述べられている。金剛智（Subhakara-simha六三七—七三五）がシナに渡来て密教を伝えたのは七一〇頃からであるから、金剛智のことについている本書の成立は、それより以後でなければならない。

本書には、「法句經云」として、偽法句經からの引用が一回なされている。⁽⁸⁾それは偽法句經第一品の第一一偈である。因みに本書には、仏藏經、維摩經、金剛經、楞伽經、思益經、涅槃經、法華經、大般若經、般若心經、華嚴經、寶積經、決定毘尼經等の有名な經典からの引用も屢々なされているが、偽經と考えられる金剛三昧經、無垢光転女身經、大仏頂經等からの引用も少くない。殊に金剛三昧經からの引用は六回程ある。

本書は上述の引用諸經からも知られる如く、また真言密教的な引用さえあって、特に禪関係のものとは思われないけれども、唐宋時代の禪書が引用するものと類似した經典や偽經類を引用している点から、何等かの意味で禪関係の文献と共に通していることが知られる。恐らく禪に幾分関係ある人の手によつて偽作されたものであろう。⁽¹⁰⁾

四、楞伽師資記。本書も燉煌発掘のものであって、北宗禅の一派としての楞伽宗の系譜を述べたものである。その系譜は

求那跋陀羅—菩提達摩—惠可—僧璨—道信—弘忍—神秀—普寂—淨覺

と伝わるものであつて、著者の淨覺（—七一三）は、ここに初期時代の禪宗の歴史や思想を掲げており、資料的にも極めて重要なものである。

本書の中には偽法句經が二回程引用されている。第一は著者自身の序文の中に

法句經云、參羅及萬像、一法之所印⁽¹¹⁾

とあるものであり、これは偽法句經第一品第一七偈の前半である。第二は道信（五八〇—六五一）伝の中に、道信の語として、「法句經云」の下に偽法句經第一品第一七偈が引用されている。もし右の文が実際に道信の語であり、道信が偽法句經を引用したとしても、彼は偽法句經を始めて経録に記載している内典録の著者道宣（五九六—六六七）より十数年の先輩にすぎず、同時代の人であるから、道信による偽法句經の引用も決して不可能ではない。

法句經云、說食之人、終不能飽⁽¹⁹⁾

五、曆代法寶記。本書も燉煌出土のものであつて、南宗にも北宗にも属しない蜀（四川省）の保唐系の禪の系譜を述べたものである。その系統は

菩提達摩—惠可—僧璨—道信—弘忍—智詵—處寂—無相—無住

と続いているが、この派では、南宗の六祖慧能が弘忍から伝衣を受けた正系であることを認め、その伝衣は六祖下の南宗智詵が授かり、これが保唐派に伝えられているとするのである。

この曆代法寶記の中には、偽法句經が六回程掲げられている。第一回は著者無住（七一四—七四）の序文の最初に諸經類の名を列挙している中に、法句經の名も金剛三昧經と並べて掲げられている。それは経名のみで、文句の引用ではない。

第二回は、「法句經云」として、偽法句經第一品第一五偈が引用されている。⁽¹⁴⁾そこには引続いて金剛三昧經からの引用もなされている。⁽¹⁵⁾

第三回は無相（＝金和上—七六六）の言として、「法句經云」として、偽法句經第一品第一三、一四の二偈が引用されている。⁽¹⁶⁾その少し後方には「金剛經云」として、文句が引かれているが、これは実は金剛三昧經からのものである。⁽¹⁷⁾第四回も金和上の言の中に、

法句經云、說食之人、應得無飽⁽²⁰⁾とある。これは偽法句經第二品に「說食與人、應得無飽」とあるのを、多少字句を変えて引用したものであろう。第五回と第六回も金和上の語の中にあるが、ここでは経名を掲げず、

また經典からの引用ともせず、金和上自身の語とされている。しかし前者は「一亦不爲一、爲一破諸數」⁽²¹⁾とあり、これは一字だけ違っているが偽法句經の法句中の第一七偈前半に当たり、後者はこの一行後に「參羅及萬像、一法之所印」とあつて、第一六偈の前半である。

以上によつて、無相、無住という蜀地の保唐派又は淨衆派と云われる禪宗でも、偽法句經を依用重視していたことが知られる。殊に法句偈は譜誦されていたものであろう。

六、頓悟入道要門論。本書は南宗禪の南岳下の大珠慧海の作である。その系統は

慧能—南岳懷讓—馬祖道一—百丈懷海
大珠慧海

となり、彼は八〇〇年頃まで生存したと云われる。本書には偽法句經が三回程引用されている。第一回はその卷上に

法句經云、於畢竟空中、熾然建立、是善知識也

となり、彼は八〇〇年頃まで生存したと云われる。本書には偽法句經が三回程引用されている。第一回はその卷上に

が掲げられている。⁽²⁷⁾ここに宝藏論が肇論と共にあるのは、宝藏論も僧肇作とされていたからであるかも知れないが、そこには共に作者が明記されていないから、断定することはできない。

次いで天台宗章疏（九一四）には、肇論関係を掲げている附近にも、その他の場所にも、宝藏論は全く述べられていない。東域伝燈目録（一〇九四）では、肇論関係の文献の附近にはないが、後方に

寶藏論 一卷

第二回は卷下に「法句經云」として偽法句經第一一品二四偈中の第一六偈の最初三句を引いている。⁽²⁵⁾第三回も卷下にあつて、そこでも「法句經云」として、偽法句經第一四偈を引用している。

があり、下註によれば、甲本には「頭註曰、私僧肇撰」とあるとされているから、一部の写本では、本書が僧肇作とされていたことが知られる。同じ頃の高麗の義天錄（一〇九〇）卷

三には

寶藏論 一卷 僧肇述

として、本書が僧肇作であることを明記し、且つ肇論及びその関係文書と共に掲げられている。

以上によつて、宝蔵論は初め三論や天台等の教宗によつては余り問題とされず、況んやこれを僧肇作とすることも全くなかつたと思われる。ずっと後世の一一世紀の終りになつて、始めて僧肇作と明記し、肇論等と同列に置かれるようになつた。これらの点から、宝蔵論が僧肇作であることは、近代の学界では疑われ、否定されるようになつた。

ところで明の弘治甲子の刊本の宝蔵論には、唐代の禪僧懷暉（一八一二）の序文が載せられているから、宝蔵論が九世紀の初頭の存在したことは推測される。しかもそれに禪僧の序文が附せられていることから、少くとも禪者がこれを依用重視していたと考えられる。この点は圭峰宗密（七八〇—一八四二）が禪源諸詮集都序二上に、

寶藏論亦云、知有有壞、知無無敗、真知之知、有無不計

として、本書の名を掲げてその文を引用していることからも知られる。

更に宝蔵論を僧肇作であると云い出したのも禪家人達によつてではないかと思われる。何となれば、圭峰宗密は円覚経略疏註上一に

肇公云、法身隱於形殼之中、眞智隱於緣慮之内
として、僧肇の説を引いているが、これは肇論の引用ではなくして、宝蔵論第二品の

若執有身者、即有身礙、身礙故即、法身隱於形殼之中、若執有心者、即有心礙、心礙故即、眞智隱於念慮之中

の文から横線を引いた部分を、多少文字を変えて引用し、又は文字が変化して來たものである。類似の例は宗密の他の著述の中にも見出される。

以上によつて、宗密は宝蔵論を僧肇作と見なしていたことが知られる。この説は宗密に始まつたものか、彼以前からあつたものか不明であるか、とにかく九世紀の初め頃には、禪家の間で宝蔵論が重視され、僧肇作として伝えられていたらしい。禪家のこの風習が、後に禪が隆盛となるに従つて、他の教宗でもこの禪宗の説を採用しないわけには行かなくなつて行つたものであろう。

さて宝蔵論の中には、偽法句經の語句が一回引用されている。宝蔵論は他の經論を引用する場合にも、その經論名を決して掲げない。今の場合にも

經云、森羅及萬象、一法之所印

として、単に「經云」としているが、これは云うまでもなく、偽法句經第一品第一六偈前半であつて、多少文字が變つてゐる。宝蔵論が偽法句經を引用していることは、本書が五世

紀初頭の僧肇の作でないことを証明することにもなる。それでは宝蔵論の成立年代はどうであろうか。

本書の中には、清虛、太一、金丹、玄亥、玄道、太清、真精、冲虛、玄牝というような老莊的用語が極めて多いが、また古教照心というような禅語も出ていている。本書に引用されている經文から見れば、それはすべて玄奘以前の旧訳語のみである。般若心經にある「色即是空、空即是色」の語は羅什訳にもあり、現に僧肇も肇論にこの句を引いているのであるから、それは玄奘の新訳から取つたと見る必要はない。この点から、宝蔵論は玄奘以前に既に成立したのではないかと考えられ、従つて、偽法句經に引続いて作られたものであろう。

1 関口真大、達摩大師の研究（昭和三二年）達摩禪師論は卷頭に写真でその全文を掲げ、巻末四四五頁以下にも附録として示されている。

- 2 同上、四四八頁、五九頁参照。
- 3 大正八五・一四三b
- 4 宗教研究、新一四ノ一（昭和一二年）一二三一三六頁
- 5 禅宗史研究四六八一五一〇頁
- 6 宗教研究同上一三三頁b、禅宗史研究五〇一頁
- 7 大正八五・一一九三b
- 8 同上一一九四c
- 9 金剛三昧經の引用個所とその金剛三昧經（大正九）における場所を示せば、次の如くである。

- 10 1 大正八五・一一九三c || 大正九・三七一b 2 大正八五・一九五a || 大正九・三七〇b 3 大正八五・一一九六b || 大正九・三七三c 4 大正八五・一一九六c || 大正九・三六七a 5 大正八五・一一九七b || 大正九・三六六a 6 大正八五・一一九七b || 大正九・三六六b | c
- 11 この諸經要抄は開元錄卷一八の偽妄經中にある諸經要集二巻と何等かの関係があるかも知れない。尤もこの二巻本は三階教祖信行（五四一—九四）の作とされるから、諸經要抄が七二〇年以後の成立と見られる点で、両者は別物である。しかし信行禪師後に三階教の人々によつて多少改変されたものと見られれば、諸經要抄が三階教の人々によつて依用される經典としては、不適当ではないようである。
- 12 大正八五・一二八三a
- 13 同上一二八九b
- 14 大正五ー・一七九a
- 15 同上一八三a
- 16 大正九・三六八a
- 17 大正五ー・一八九a
- 18 大正九・三六九a
- 19 大正五一・一九二c
- 20 大正八五・一四三二b
- 21 大正五一・一九三a
- 22 正統二・一五・四二一a下

- 23 22 大正八五・一四三三c
- 24 23 大正八五・一一九三a

正統二・一五・四二五b上

同上二・一五・四二九b上

大正五五・一一〇〇c

同上一一六三b

同上一一七七c

湯用形、漢魏兩晉南北朝佛教史三三二頁。牧田諦亮、寶藏論

について（肇論研究二四七頁以下）なお宋代の淨源（一一〇一—一八八）の肇論中吳集解には、寶藏論を屢々引用しており、ここでは寶藏論が僧肇作であることを認めていた。

湯用形前掲頁

大正四八・四〇五a

大正四五・一四四a

大正三九・五三三b同じ引用は宗密の円覺大疏上四（正統

一・一四・一三二a下）にある。

大正四五・一四七b

円覺大疏鈔一ノ三（正統一・一四・二〇八a上）には、肇公

云として「守真抱一、不染外物、清虛太一、其何有失」の句を引用しているが、これも寶藏論第一品（大正四五・一四五a）からものである。

大正四五・一四八c

○一八四一の諸著書には、偽法句經が屢々引用されている。彼は南宗禪の荷澤派に属し、その系譜は慧能—荷澤神會—磁州法如—荊南惟忠—大德道圓—圭峰宗密となり、この派もかなりに栄えたようである。宗密は華嚴にも心を寄せ、華嚴宗の第四祖清涼澄觀（七三七—八三八）にも学び、その高弟として第五祖とせられるが、彼の著述は禅に関するものが多く、特に円覺經の註解及び実践化には最も力を用いた。彼によつて偽經類からの引用がなされるのも、禅者としての立場からである。

さて彼の著述の中で、偽法句經を引用しているのは極めて多い。殊に円覺大疏及びその鈔には最も多く引用されているが、今は煩を厭うて、大正藏經に収められている禪源諸詮集都序及び円覺經略疏註の二書だけについて考察することにしたい。

先ず禪源諸詮集都序には、その卷上二に「法句經云」として、偽法句經第一品第一五偈を引用している。⁽¹⁾ 因みに本書ではその直前に、偽經の金剛三昧經を引用⁽²⁾し、後方でも更に金剛三昧經を引いている。このように宗密は本書に金剛三昧經や法句經などの偽經類を依用していることが知られる。次に円覺經略疏註について見るに、そこには偽法句經からの引用が四回程ある。先ず第一回はその卷上一に

四 宗密及び延寿の著書における 偽法句經の引用

八、禪源諸詮集都序その他宗密の諸著書。圭峰宗密（七八

の文がある。これは偽法句經第一品第六偈の第一句と第三、第四句の部分を合したものである。第二回は卷上二に、右の第六偈を完全な形で引用している。第三回は卷下二に法句經云、善解深法空無相無作無生無滅、了達諸法從本來究竟平等、無業無報無因無果、性相如如、住於實際、於畢竟空中熾然建立、是名眞善知識

という文が引かれている⁽⁶⁾。これは偽法句經第五品からの引用である。第四回は同じく卷下二に、

法句經說、善知識如父母眼目脚足梯路衣食鎧繩藥方等乃至云、善男子、善知識有如是無量功德、是故我今教汝親近

とあるのは、偽法句經第六品全体を中略して抄出したものである。因みに本書は金剛三昧經をも四回程引用している。

このように宗密は彼の著述の隨處に、法句經等の偽經を依用しているのみでなく、彼が最も力をつくし、それに対しても

數種の膨大な著述をなした円覺經そのものが偽經とされるものである。これは禪家では經典の伝承や外相の真偽よりも、その内容の眞偽優劣に主眼を置いていたので、眞實義を含むものは、偽經とされるものでも、決して拒むことをしなかつたからである。

九、宗鏡錄及び万善同帰集。これらは南宗禪の中、青原下の法眼宗に属する永明延壽(九〇七—七五)の作である。彼の

系譜は

慧能—青原行思—石頭希遷—天皇道悟—龍潭崇信—德山宣鑑—雪峰義存—玄沙師備—羅漢桂琛—法眼文益—天台德韶—永明延壽となり、景德伝燈錄の著者永安道原と同門である。

宗鏡錄は百巻から成る大冊であって、その中には種々なる文献からの極めて多くの引用があつて、資料の宝庫とも見なさるべきものであるが、そこには金剛三昧經からの引用も少くない。偽法句經からの引用は九回程あるが、未検出のものがあるかも知れない。第一回の卷一及び第六回の卷三四には、共に単に「經云」として「森羅及萬像、一法之所印」の句を引いているが、これは云うまでもなく偽法句經第一品第一六偈の前半である。恐らく當時これらの偈は禪家の間では極めて有名であつて、「經云」だけで、それが法句經のものであることが、直ちに知られたものであろう。

第二回は卷三に、

法句經云、焰光無水、但陽氣耳、陰中無色、但緣氣耳⁽¹³⁾とある。これは偽法句經第四品に

炎邊住者、知此地中本來無水、見彼走人知其妄相、便生咲語走人、此中無水、但陽氣耳……衆人言、陰中無陰、心中無心、念中無念、但緣氣耳⁽¹⁴⁾

とある文から抽出して、多少字句を改めたものである。

第三回は卷八に、

法句經云、菩薩於畢竟空中、熾然建立⁽¹⁵⁾

とある。これは偽法句經第五品に「於畢竟空中、熾然建立⁽¹⁶⁾」とあるのを引いたものである。第四回は卷二三に

法句經云、善知識者、有大功德、能令汝等於貪欲瞋恚愚癡邪見五欲五蓋衆塵勞中建立佛法、不起一心得大功德、譬如有人持堅牢船渡於大海、不動身心而到彼岸⁽¹⁷⁾

とあり、これは偽法句經第九品冒頭の文である。第五回は卷二九に、⁽¹⁸⁾

法句經頌云、森羅及萬像、一法之所印、一亦不爲⁽¹⁹⁾、爲欲破諸數⁽¹⁹⁾とあり、これは偽法句經第一一品の第一六偈前半及び第一七偈前半である。

第六回は前出。第七回は卷三四に

法句經偈云、若學諸三昧、是動非是禪、心隨境界流、云何名爲定⁽²⁰⁾とあり、これは偽法句經第一一品第一五偈である。第八回は卷九四に「法句經偈云」として第一六偈を引いている。⁽²¹⁾第九

回は卷九六にあつて、これは第四回の場合と殆んど同じい。ただ第四回の文の前に「佛言、善男子」の句が加わっている。⁽²²⁾以上で宗鏡錄における偽法句經の引用は考察し終つたが、なお宗鏡錄には、別に「法句經云」という引用が何回かある。これは偽法句經からのものではなくして、真正の法句經又は法句譬喻經からのものである。故に参考のためにそれらの例をも一応眺めることにしたい。

先ず卷三〇に

僞作の法句經について（水野）

法句經云、人壽百歲、情欣放逸、不如一日、歸心空寂⁽²³⁾とあるが、これは偽法句經からのものではなく、真正の法句經からの引用と思われる。尤も現存の漢訳法句經にはこれと同一語句のものは見当らないけれども、これはパーリ法句經一一二

Yo ca vassa-sataṁ jive kusito hina-viryo
ekāhaṁ jivitaṁ seyyo viryam ārabhato dalihaṁ.

に類似し、漢訳法句經では

若人壽百歲、懈怠不精進、不如生一日、勉力行精進⁽²⁴⁾

とされている。次に卷三八には、「法句經心意品云」として、一道人の物語が引かれているが、これは法句譬喻經心意品から引用したものである。⁽²⁵⁾

また卷九四に第八回目に「法句經偈云」として、偽法句經を引用した直後に、

又云、雖誦千章、句義不正、不如一要、聞可滅意⁽²⁷⁾

とあるのも、偽法句經の引用に続いて「又云」とあるに拘らず、これは偽法句經からのものではなく、真正の法句經卷上、述千品の偈である。尤もその第一句は引用のものと一字違つて「雖誦千言」となっているが、他は全同である。

以上によつて、延寿は「法句經」の名の下に、偽法句經だけではなく、真正の法句經も法句譬喻經をも指していたことが知られる。なお参考のために、宗鏡錄が金剛三昧經を引用す

ることが三十回に近いので、その個所及び金剛三昧經の場所を註記しておくことにする。⁽²⁹⁾

次に万善同帰集三巻についてであるが、ここにおける引用も、宗鏡錄の場合と殆んど同様である。本書における偽法句經の引用は四回にすぎない。第一回は巻上に「法句經云」として、偽法句經第一品第一五偈が掲げられている。第二回も同じく巻上に、

法句經云、戒性如虛空、持者爲迷倒⁽³⁰⁾

とあるのは、偽法句經第一品第一一偈の後半である。第三回は巻下に、

法句經云、若能心不起、精進無有崖⁽³²⁾

とあるが、これは偽法句經第一品第一四偈の後半である。

尤も偽法句經ではこの後半の第三句は「若能心不妄」とあって、一字だけ違っている。第四回も同じく巻下に、

法句經云、菩薩於畢竟空中、熾然建立⁽³³⁾

とあるのは、宗鏡錄における第三回の引用と全同で、偽法句經第五品からのものである。⁽³⁴⁾

偽法句經からの引用は右の如くであるが、本書も宗鏡錄の場合と同じく、法句經の名の下に真正法句經及び法句譬喻經をも屢々引用している。それは巻中に、

法句經云、如裹香之紙、繫魚之索、佛語諸比丘、夫物本淨、皆由因緣、以興罪福、近賢明則道義隆、友愚暗則殃禍集、譬如紙索、

近香則香、繫魚則臭、漸染翫習各不自覺、頗曰、鄙夫染人、如近臭物、漸迷習非、不覺成惡、賢夫染人、如附香熏、進智習善、行成芳潔⁽³⁵⁾

とあるが、これは法句譬喻經卷一の文を取捨して引用したものであり、「頗曰」以後が法句經の偈である。⁽³⁶⁾

次に同じく巻中に、

法句經云、帝釋命終、入驢母腹中、因歸命三寶、驢羈解走、破壞坏器、其主打之、尋時傷胎、其神却復天身、佛爲說偈、帝釋聞之達罪福之變、解興衰之本、遵寂滅之行、得須陀洹道⁽³⁸⁾

とあるのは、法句譬喻經卷一の文を取意要略したものである。⁽³⁹⁾また同じく巻中に、

法句經云、行慈有十一種利、佛說偈言、履行仁慈、博愛濟衆、有十一譽、福常隨身、臥安覺安、不見惡夢、天護人愛、不毒不兵、水火不衷、在所得利、能昇梵天、是爲十一⁽⁴⁰⁾

とあるのは、法句譬喻經卷一からの引用であり、偈句は法句經上のものである。次に巻下に、

法句經云、佛告梵志、世有四事、不可得久、一者有常必無常、二者富貴必貧賤、三者合會必別離、四者強健必當死⁽⁴¹⁾

とあるのは、法句譬喻經卷一から引用したものである。更に右の引用に引続いて、

又經云、非空非海中、非入山石間、無有地方所、脫之不受死⁽⁴⁵⁾
とあるのは、真正の法句經卷上にあるものであり、これは法句經云、如裹香之紙、繫魚之索、佛語諸比丘、夫物本淨、皆由因緣、以興罪福、近賢明則道義隆、友愚暗則殃禍集、譬如紙索、

句譬喻經卷一にも出でいる。⁽⁴⁷⁾

最後にこれは法句經とせられていないけれども、

佛說偈云、心爲法本、心尊心使、中心念惡、卽言卽行、罪苦自追、
車轍于轍、心爲法本、心尊心使、中心念善、卽言卽行、福樂自追、
如影隨形⁽⁴⁸⁾。

とあるのは、法句經卷上の雙要品にある有名な偈⁽⁴⁹⁾で、パーリ法句經の第一、第二偈を訳したものである。

なお万善同帰集には偽經の金剛三昧経から引用も五回程なされている。要するに延寿の宗鏡錄及び万善同帰集には、右に述べた偽法句經や金剛三昧経だけでなく、偽經とされる首楞嚴經、円覺經、瓔珞本業經、像法決疑經、法王經、釈摩訶衍論等からの引用も少なく、また例の偽作の宝藏論は二十回程も引用され、更には宝藏論注や元曉の金剛三昧經論までも引用されている。

- 1 大正四八・四〇五b
- 2 大正九・三六八a
- 3 卷下一（大正四八・四〇七c）これは大正九・三六七aから
の引用。
- 4 大正三九・五三五a
- 5 同上五六八b
- 6 同上五六八a
- 7 大正八五・一四三三c
- 8 大正三九・五七〇a

10 9 大正八五・一四三三c以下
左の表中、上方は円覺略疏註の巻数と個所、下方はそれが引

用されている金剛三昧経の場所を示す。

1 卷上一（大正三九・五三一b）	大正九・三六六b
2 卷上一（大正三九・五三四c）	大正九・三六六b
3 卷上二（大正三九・五三六c）	大正九・三六六b
4 卷上二（大正三九・五四一b）	大正九・三六六b

11 大正四八・四一八c

同六一二b

同四三一b

10 9 大正八五・一四三三b
大正四八・四五七a
大正八五・一四三三c
大正四八・五四三b
大正八五・一四三四b
大正四八・五八四a
同六一五c
同九二八c
同九三七b
同五九三c
大正四・五六四c
大正四八・六三八a以下
大正四・五八四b
大正四八・九二八c
大正四・五六四b

左の表の上方は宗鏡錄の巻数頁数を示し、下方はそれが引用された金剛三昧經の場所を示す。

29 同九八三a
大正八五・一四三三c
同九八三b
大正四八・九七五a
大正四・五八三c

1巻二（大正四八・四二三a）||大正九・三六七b 2巻三

（同四三一c）||大正九・三六六c 3巻五（同四四三a）||
大正九・三七二b 4巻一一（同四七七c）||大正九・三七一

c 5巻二六（同五六六b）||大正九・三七〇b 6巻二七

（同五六七a）||大正九・三七〇a 7巻二七（同五七一c）
||大正九・三七〇a 8巻二九（同五八七c）||大正九・三七

一c 9巻三〇（同五九三c）||大正九・三七一a 10巻三三

（同六〇六b）||大正九・三七一c 11巻三五（同六一七b）
||大正九・三七一a 12巻三八（同六三七c）||大正九・三七

一b 13巻三九（同六四五b）||大正九・三七一b 14巻三九
（同六四九a）||大正九・三七三b 15巻五六（同七三八a）
||大正九・三六八b 16巻六六（同七九〇b）||大正九・三七

一a 17巻七七（同八四二b）||大正九・三七〇c 18巻七九
（同八五四a）||大正九・三六九c 19巻八二（同八七〇a）
||大正九・三七二a 20巻八三（同八七二a）||大正九・三七

一c 21巻八三（同八七五a）||大正九・三六八b 22巻八六
（同八九〇c）||大正九・三七〇c 23巻八七（同八九四c）
||大正九・三六九c 24巻八七（八九五a）||大正九・三七一

a以下 25巻八九（同九〇五a）||大正九・三六六b 26巻九
四（同九二五b）||大正九・三六九b以下 27巻九四（同九二

九a）||大正九・三六七a
大正四八・九六三c

31 30 同九六五a

50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32
大正四八・九八六b
大正四・五七六a以下
大正四八・九八六b
大正四・五九九b
同五七七a
大正四八・九九一b
大正四・五六二a

左の表中、上方は万善同帰集の巻数頁数を示し、下方は引用された金剛三昧經の場所を示す。

1巻上（大正四八・九五九b）||大正九・三六九c 2巻上
（同九六三c）||大正九・三六八a 3巻下（同九八三b）||
大正九・三七二b 4巻下（同九八三c）||大正九・？ 5巻
下（同九八九b）||大正九・三七一c

五 むすび

前二章における論証によつて、偽法句經を引用している文献は唐から宋へかけての、主として禪宗関係のものであることが知られた。それでは禪家以外の教家人々によつては、法句經のような偽經類は引用されなかつたかといふに、ここに例外的なものとして、華嚴宗中興の祖清涼澄觀（七三七—八三八）の著述がある。彼の代表的著作としての華嚴經隨疏演義鈔九〇卷がそれであつて、彼は龐大な本書の中に、少くとも二回以上、偽法句經を引用している。

第一回は卷七に、

法句經云、若說諸持戒、無善無威儀、戒相如虛空、持者爲迷倒、
若學諸三昧、是動非坐禪、心隨境界流、云何名爲定⁽¹⁾

とあり、これは偽法句經第一品二四偈中の第一偈と第一五偈とを引いたものである。第二回は卷八に、

法句經云、森羅及萬像、一法之所印……又云、一亦不爲一、爲欲
破諸數、淺智著諸法、計一以爲一⁽²⁾

とあるのは、最初のが偽法句經第一品の第一六偈前半であり、後のは第一七偈を引いたものである。唯だ後者の最後の二句は、偽法句經のものと多少違つてゐる。本書にはその他にも偽法句經からの引用があるかも知れないが、今見出せない。とにかく華嚴学者としての澄觀が偽經を引用していることを藉り参照するけれども、それは仏教の根本精神としての宗

とは珍らしいことである。

尤も彼の弟子の圭峰宗密の著わした諸書には、偽法句經だけでなく、金剛三昧經、寶藏論を始めとして、種々の偽經類が盛んに引用されているのに、本書には法句經以外の偽經類は全く引用されて居らず、教家の立場と全く同様である。これはいかに解すべきであろうか。

澄觀は専門の華嚴学以外にも、三論や天台等を学んだだけでなく、禪についても北宗の慧雲や牛頭宗の徑山道欽、更には特に南宗荷澤派の荊南惟忠や洛陽無名に学んだ。そして景德伝燈錄では彼は無名の弟子として伝えられている。彼はその他世俗の經伝子史の類をも広く学んだので、一般の教宗学者より幅の広い人であつた。彼が偽經とされた法句經を自由に引用したのは、この幅の広さによるか、禪家的影響によるかであろう。

を悟るためにすぎない。教宗のように經論自身に絶対の権威を置き、その真偽や形式を問題とすることはない。真精神としての宗が含まれているものならば、大小乗、權実を問わない。真正の翻訳經でなくとも差支えない。要は宗を見出し、宗を体得することにある。宗が汲み取られさえすれば、森羅万象も經教と見なされる。禪家が以心伝心を唱え、教外別伝を強調したのは、宗のみを問題としたからである。

このようないい禅宗の立場からすれば、偽經類をも真經と区別なしに引用することは、決して不思議ではない。禪宗関係の文献に偽經類が引用されているのはそのためである。そして既に見たように、禪宗としては、北宗系も南宗系も、その他の保唐派等の系統も、また南宗では荷沢系も南岳系も、青原下の法眼系でも、すべて偽法句經を引用しているし、また上述の議論では触れなかつたが、宋末の曹洞系の從容錄でも偽法句經の偈を掲げてゐるから、この傾向は達摩禪一般に共通したものと云える。そこに禪宗が教宗と全く異つたものとされ、教宗を教門と呼ぶに対し、禪宗を宗門と名づけた所以があり、禪家が自己の禪を大乘禪と区別して最上乘禪と云つた理由があるのである。

ところで最後にそれでは偽法句經の成立はいつ頃で、いかなる人によって作られたであろうか。今まで見て來たように、偽法句經は經錄においては唐初の内典錄（六六四）に始め

て出でているから、その頃までには成立していた。このことは禪宗第四祖の道信（五八〇—六五一）が偽法句經を引用したことからも証明される。そして偽法句經の中には、その頃訳出されている玄奘の新訳語は全く出ていないのみでなく、偽法句經を引用している宝藏論にも、偽法句經を註釈している法句經疏にも、玄奘の新訳語は全く見られない。既に宝藏論や法句經疏が玄奘以前だとすれば、偽法句經の成立はそれより更に以前ということになる。それではどこまで遡れるかと云うに、この点は明らかでない。

同じ種類の偽經としての金剛三昧經には、それ以前にはなくて、玄奘訳に始めて出で来る新訳語が幾つか用いられており、また達摩の二入四行だけでなく、四祖道信や五祖弘忍の思想さえも採用しているようであるから、その成立の上限はかなりはつきりしており、また下限にしても金剛三昧經に対する元曉（六一七—六八六）の註釈である金剛三昧論が存在するから、一応決められうる。従つて金剛三昧經の成立は六五〇—六八〇頃の約三十年間にあると推定されるけれども、偽法句經にはこのような決め手はない。恐らく偽法句經の成立は六五〇年をそれ程遡るものではないであろう。

それでは本經の作者は誰かというに、これは全く不明である。この点は金剛三昧經や宝藏論についても同様である。何れの場合も、その作者は、純粹の禪者ではないかも知れない

が、禪と何等かの関係ある自由思想家であつたことは想像される。偽法句経には、特別の思想傾向を示すものは見当らないけれども、初期の禪宗文献にもよく出てくる八風吹けども動ぜずということが、偽法句経に出ている。その文を紹介するならば、

譬如下有人、依須彌山、假使八風、不_レ能_ウ吹動_エ、依善知識、亦復如_レ是、八難之風、不_レ能_ウ吹動_エ⁽⁴⁾。

というのであって、これは我々の心が利害や毀譽褒貶等の八世間法に動かされないことを云つたものである。禪家にこの用法があつたから、偽法句経がそれを引用したものか、偽法句経から禪家が引用するようになつたものか、不明であるけれども、何れにしても、この文句は両者の間に何等かの関係があるのでないかを思わせる。

1 大正三六・五〇c

2 同六〇c 以下

3 従容錄第一一則の評唱中に「師舉、法句經云、森羅及萬象、一法之所引云々」とある。(大正四八・一二三四b)

4 大正八五・一四三四c